

サステナブルキャンパス 先進事例と今後の施設方策

部会員 **興津 利継**

おきつとしつぐ

株式会社FOR

代表取締役

認定ファシリティマネージャー



大学を取り巻く課題と活動テーマの変遷

キャンパスFM研究部会は、大学を取り巻く課題に応じて活動を変化させてきています。以前に調査対象とした“キャンパス都心回帰”や“ラーニングコモンズなどの場づくり”は施設事例でもありますが、そうした施策を採用した背景やトレンド・規模の情報を、収集・整理することにも重きを置いてきました。大学の施設経営には、それが重要と考えるようになってきました。

以前は「施設施策の背景を考える」でしたが、最近は「取り巻く変化や大学経営の状況が、キャンパス施策にどんな影響を及ぼすか？」を考えるように変わってきました。その最初の検討成果が、書籍『財務視点から考える私立大学のファシリティマネジメント』の発刊です。この活動を通じて、私大全体では施設の維持更新に必要な積立率が2010年頃には100%を下回り、70%台に低迷し続けていることを知りました。その事実だけでも、「スペースの無駄を無くし、将来の建替面積を縮小する」必要があることが読み取れます。

昨年度は、コロナ禍中のオンライン授業普及に加えて、同年秋の大学設置基準改正もあり、デジタルを活用した学びや単位互換などが、キャンパスのスリム化を推し進めるドライバーになると予測し、文献調査と有識者ヒアリングを進めました。これを受けた施設施策は未だ登場してきていませんが、ゲートウォッチを続け、発信を続けることが私達の使命であると考えています。

サステナブルキャンパス先進事例調査

今年度は、従前、文献調査に留めていたSDGsやZEB

化の先進事例を視察しました。コロナ禍以降、研究部会はオンライン開催に変わり、部会員は東北から関西まで広がりましたが、相互交流の機会は失っていました。そこで、視察後に部会員間交流の場も設けるようにしました。

FMフォーラム2024での当研究部会の講演は、視察を実施した「文教大学 東京あだちキャンパス」「千葉商科大学 市川キャンパス」「中央大学 多摩キャンパス FOREST GATEWAY CHUO」「明治大学 和泉ラーニングスクエア」の先進4事例を中心に置きました。

いずれも“学生本位の学びの場の実現”と“SDGs、カーボンニュートラルに向けた取り組み”を高次元で融合しており、他校の方々にも参考になる事例です。講演資料は近日中に、JFMAホームページの当部会研究成果に掲載されますので、そちらをご覧ください。

視察させていただいた各大学では、実践で培ったノウハウをさらに“既存棟の改善～建替え～再構築”や“他キャンパスでの実践”等に展開していられるものと推察します。

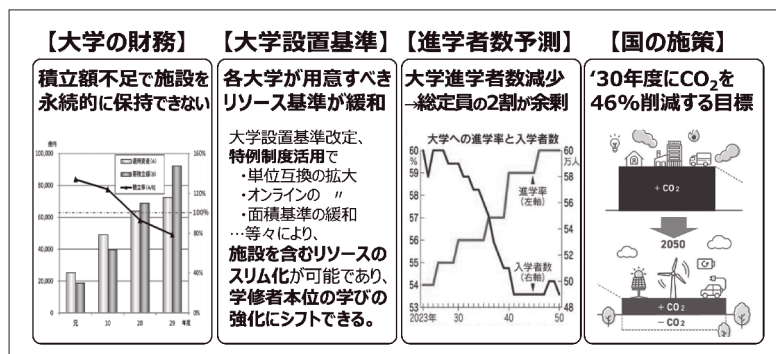
調査から読み取れる今後の方向性

2023年7月に「大学入学者等の将来推計」（文部科学省）が示され、新聞紙面を賑わしました。出生数減少は大学進学者数減少になり、2040年には大学総定員の2割が余剰になる予測です。大学統廃合や閉鎖準備に対する補助金の話もありますが、私大総数593校のうち1学年定員が千人超の134校が全定員の3分の2を占めており、一部の大学の統廃合・閉鎖では済まないと思われます。

これまで見てきた「積立額不足で保有施設の永続保持は無理」「設置基準改正で、個々に用意すべきリソース基

準が緩和」「2040年には全定員の2割が余剰」「2030年には全建物のCO₂を46%削減」を並べて俯瞰すると、学修者本位の学びは強化しつつも、従来の考え方に縛られずにスリム化を推し進める方策が多くの大学にとって急務であることが見えてきます。

今後も時代変化を読み込み、施設方策の方向性を明らかにしていきたいと考えています。◀



図表 大学キャンパスの施策に影響を与える要因